

■ルール

リーチに対する一発・裏ドラなし

順位点はトップから順に+12・+4・▲4・▲12

■システム

認定プロをはじめとするシード選手と予選を勝ち上がった選手、合計36名で争われる。

ポイント持ち越しの半荘6回戦。4回戦進出16名、準決勝5回戦進出8名、決勝6回戦進出4名。

(文中敬称略)

※ 文中において(P)は認定プロ、(T)はツアー選手、(LT)は女流ツアー選手、(一)は一般、を表す。

【決勝戦】

起家から、佐久間弘行(一、準決勝までトータル46.8)、木村和幸(P、73.6)、桜井一幸(一、61.2)、高見沢治幸(P、41.1)。

4選手の開始前のコメント。

日本プロ麻雀協会所属の佐久間は、「頑張ります」

今年は「雀竜位戦」「無双位戦」の決勝戦にも進出した。たった一言のコメントにも、自信が見え隠れするのは気のせい  
か？

木村は、「決勝戦に謳ってもロクな事がないので、頑張りますとだけ言っておきます」

決勝進出は今回で10回目。さすがコメント慣れしている。優勝コメントもそろそろ聞きたいものだ。

仙台在住の桜井は、意外な事実を報告。「実は今日μ会員になりました……」

日頃は日本麻将競技会(会長・青木和久)で腕を磨いている。また、学生時代から競技会に積極的に参加していたこと  
もあって、吉田賞二(T・ビッグ1)、武則輝海(T)といったベテラン選手との交流も深い。

高見沢は相変わらず煙に巻くようなコメント。「昨日の日本リーグ(中国麻将)で、2回チョンボしまして……」

麻将だけでなく、日頃の言動も時折その片鱗(全貌か?)を見せてくれる。相変わらず楽しいお方だ。

さて、東1局その1。6巡目、北家・高見沢が仕掛ける。



この仕掛けは、宇宙流というよりスーパーデジタルな匂いを感じる。あ、匂いとか言ったら小林剛(P)に怒られそうだ  
(笑)。



その直後、親の佐久間が打

ポイントが少なめの起家スタートの佐久間にとって、この親流れはかなり痛いはずだ。

東2局その1。展開が大きく動いた。

東家・木村が16巡目に少考。南家・桜井、北家・佐久間の仕掛けが入っている。



木村



すぐさま、当面の敵の桜井から2900点のアガリ。

点数は高くないが、この放銃が桜井の平衡感覚を揺らすことになるうとは……。

南2局その2、木村が8巡目に2枚目の  をポン、13巡目に  をポンして打  。



木村が、手役の限定されるような仕掛けを見せると、相手に「木村は苦しそう」というイメージを与えてしまうような気がする。同じ仕掛けを忍田幸夫(P)や小林剛あたりがやっても、全く違和感を感じない。

「じゃあ君は仕掛けるなって言いたいわけ？」

と木村に言われたら「すみません、僕も仕掛けます」としか返事できないけど……。

一方、南家・桜井は、



役なしから三色に振り替わった。それを西家・高見沢がチー……、しない!?



これは「メンゼン宇宙流」か？

しかし、ギャラリーのそんな心配をよそに、すぐさま  を引き入れ、マンガンのテンパイが入る。

16巡目、配牌からオリ気味に進めていたはずの佐久間がチー。なんと、フリテンとはいえテンパイだ。



木村が  をツモ切り。いずれにせよテンパイか…、と思ったのもつかの間、桜井が  をツモ切り！

テンパイ維持なら役なしになるとはいえ、全員にほぼ通る  切りでよかろう。桜井クラスの打ち手が、まさかドラの出に期待するほど甘い考えを持っていないはずだ。これはもったいない。

南3局その1でも桜井の変調が続く。

15巡目、2枚切れのペン  で役なしテンパイ。ここでのリーチの是非はどうでもいい。

高見沢が16巡目にリーチ。桜井はここでもヤミテン。ここでの選択もどうでもいい。

問題は桜井の最終ツモ  。高見沢には無筋である。

「なるほど、こういう牌を切らないためのヤミテンか…」と思いきや、ツモ切ってしまう。

これが高見沢のメンタンピンに刺さった。これまたもったいない。

仙台の強豪として鳴らす桜井でも、メンタルの維持がいかに大変かということがよくわかる。

南4局その1は、アガれば優勝の木村のテンパイ打牌が、高見沢の1500点につかまった。

そして南4局その2。

木村はアガれば優勝、親の高見沢はとりあえず連荘が目標。

佐久間が600・1200ツモ、3200以上のロンアガリ。

桜井がややこしい。1600・3200ツモ、佐久間から5200、高見沢から6400、木村から12000のロンアガリが必要(ちょっと計算に自信がないけど)。

1巡目、南家・佐久間がダブ南をポン。



その後3巡続けてツモ切り。あと1翻必要だが、道のりは険しそうだ。  
アガリトップの西家・木村の配牌も重い。



イーシャンテン一番乗りは3巡目の高見沢。



しかしここから伸びない。その間に佐久間が5巡目に六をチー。

8巡目、佐久間が待望の中を引き入れた。



10巡目、佐久間がカン八テンパイ。

同巡、木村も追いついた。ピンドラ1、待ちは  
佐久間と木村の間で観戦していた僕の心拍数は上がるばかりだ。  
その時の桜井の手はこう。



そして、桜井がツモ切った牌は…、八！  
佐久間弘行、公式戦初優勝の瞬間だった。

終始、主役を演じていたのは、木村と桜井だった。

影でアヤをつけていたのは、高見沢だった。

じゃあ、佐久間の勝因は？

決勝戦だけに関して言えば、少ないチャンスを伺って、最後まで粘り強く戦ったことだろうか。

しかし、こういう勝ち方は実力がないとできない。では佐久間はどのようにして実力をつけたか？

答えは単純明快。勉強量と練習量の積み重ねだ。

原浩明(P)主宰のこうめい塾、山口まや(最高位戦)主宰の山口組(おっかない名前だね)など、あらゆる研究会にはほとんど参加し、また、自分の所属団体だけではなく、あらゆる競技団体の公式戦に積極的に参加して、それらを自らの経験値にしているのだ。

今回、予選も含めて、若手や中堅のツアー選手がだらしなかった(もちろん僕も)。準決勝に残ったツアー選手は、ベテランの奥屋敷敬二(T)だけ。

佐久間の麻雀に対する姿勢、意識は、ツアー選手、特に若手は(もちろん僕も)見習うべきだ。  
ガラスのプライドを確固たる自信に変えるために。